

縁の下の力持ち



市民や地域団体などとともに、地域社会を支えています

札幌は雪が多く降る地域にある都市としては、世界でもたぐいまれな大都市であり、その冬の生活は、言うまでもなく除雪作業に支えられています。今月の表紙は、「福祉除雪事業」に協力している「東区災害防止協力会」の人たちです。

一九七二（昭和四十七）年に結成されたこの会は、区内の建設会社五十三社で組織されており、区役所や警察と連携しながら、区内の災害防止や交通安全、暴力追放をはじめとする地域活動をしています。その一環として、協力可能な会員が地域協力員として登録し、区内の高齢者や、重度の障がいのある方などのお宅で、道路から玄関先までの除雪をしています。建設会社の従業員は、冬場、道路の除雪で忙しい毎

日を送っています。できるだけ、交通量の少ない夜間のうちに作業を済ませる必要があるため、通常の降雪時には真夜中ごろから、大雪の場合には、前日の午後八時ごろから翌朝まで、夜を徹して除雪を行います。福祉除雪に協力している人は、さらにそれから、除雪を担当するお宅に向かいます。「体力的には大変ですが、自分たちを待っている人のため、できる限り早く駆けつけます」と会員の人たちは話します。



「一般の方々に手に負えないような自然災害発生時は、私たちの出番。たいていのことはなんとかできます」と力強く語るのは、会長の安田謙一さん（五四）。

風水害の時に出勤することが多いそうで、関係機関から協力要請を受けると、出動可能な会員各社が、ダンプ、トラック、水中ポンプ、土のうなどの各種機材を引っ掛け、いち早く現場に駆けつけます。普段の仕事で区内の事情に精通しており、いざという時にも人手が確保できるので素早い対応が可能とのこと。まさに地域を支える縁の下の力持ちですね。

ひがくすとりー

第34回

牧草の生産（二）

牧草販売組合を結成する

明治の終わりころ乳牛を飼い始め、苦勞しながらも酪農経営を軌道に乗せた雁来の佐藤金蔵は、牧草生産にも力を入れました。最初は乳牛飼料とすることを目的に、牧草を作付けしていったのです。

佐藤は、牧草の生産、販売を手掛けて全国に牧草を広めました。一九二九（昭和四）年には、佐藤ら有志が、札幌村や篠路村などから集まり牧草販売組合を結成。組合は近村で生産した牧草の集荷と圧縮こん包に力を入れ、売り出しを開始します。そのころの供給先は、陸軍糧秣廠や炭鉱などでした。

牧草を軍馬の飼料にする

現在、陸上自衛隊苗穂分屯地のある場所に、かつて牧草とエンバク集積の本拠地として陸軍糧秣廠がありました。

牧草とエンバクは軍馬の飼料として明治初期から利用されていましたが、まだ生産量も少なく、軍の需要を満たしていませんでした。日清戦争、日露戦争が続くと、その需要は高まる一方となります。



現在の石造り倉庫（明治42年に完成）

処苗穂支処などが設置されています。糧秣廠時代の石造り倉庫四棟は、今も補給倉庫として利用されており、当時のたたずまいを残しています。

そこで、軍は、価格の高騰や品質の低下を防止し、かつ生産の増加を図ることなどを目的として、生産者から直接購入することとし、糧秣本廠札幌派出所を設置することを決定します。一九〇八（明治四十一）年、産地における唯一の調達機関として、牧草などの購入保管を開始。翌年、現在の分屯地に庁舎が完成しました。その後、一九四一（昭和十六）年に太平洋戦争が始まると、道内各地に糧秣廠の出張所が増設され、牧草などの確保と補給に努めました。

終戦後、連合国軍がこれを接收し、倉庫として利用することとなり、糧秣廠はその役目を終えました。一九五〇（昭和二十五）年には自衛隊の前身となる警察予備隊の札幌部隊が苗穂に創設され、幾度かの変遷を経て現在は北海道補給